

「CSR報告書2014」を読んで



2014年8月1日
神戸大学大学院
経営学研究科教授
國部 克彦

1.京阪グループの道徳経済合一説

冒頭に加藤社長とカルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社 増田社長との対談のなかで、誰のために事業をするのか?について語られている場面が印象的です。事業を拡大するときどんなことに留意するか、事業を行うことによって誰を幸せにするのか、従業員等の我慢の上に成り立つ事業であってはいけないということが話題になっており、結局それは京阪創設からの精神である「道徳経済合一説」を原点として受け継がれているからであるとされています。企業のCSR経営を考える上で、大変興味深い記事でした。京阪グループが今後どのように事業展開していくのか、またその際に何を重視していくのかがわかります。公益性の高い鉄道事業者として、地域社会の発展と沿線価値の向上を意識した価値創造です。京阪グループの事業として、どのような価値を創造されるのか、この対談を読み、京阪グループの次の展開がとても期待できます。

2.京阪グループ全体のCSR活動について

京阪グループCSRレポートは、鉄道事業法で義務付けられた「安全報告書」を兼ねているため、鉄道事業についての安全について多くの紙面を割いています。それは大変有意義なことですが、それ以外の事業分野である不動産事業やレジャー事業に関する情報量を増やされれば、事業活動の全体像がよりわかりやすくなると思います。また、本報告書の対象外ではありますが、百貨店やショッピングモール、ホテル事業などについても、グループ企業としての情報の開示を含む方向での拡充を検討されてはいかがでしょうか。冒頭の対談のなかでは、グループ全体が横断的に協力し、新しい価値を創造する話がなされており、グループとしての方針や、基本情報の抜粋・紹介など、同じブランドの下、共通の価値観で事業展開をしていることがわかる情報があれば、より京阪グループのCSR経営が見えてくるのではないかと思います。グループ全体で共通して使える重要指標を構築して、グループ全体でレベルアップを図れば、事業価値のみならず、グループと地域社会との共通価値も向上すると思います。

3.ステークホルダーとのコミュニケーション

CSR経営を行っていくなかで、特に社会性項目については多くの課題があります。京阪グループが重要だと考える課題と、社会が重要だと考える課題を突き合わせ、より重要性の高い項目を優先して対応していくことが求められます。昨年からはトップが外部の方と対談する形で、外部からの意見を取り入れられ、また2012年にはじめられたステークホルダーダイアログは、今年はグループ監査役会での課題検討という形のフォローとなりました。さまざまな形で、多くの社外からの意見と取り入れようとする姿勢は高く評価されます。今後は、そこで得られた合意した課題について、マテリアリティ(重要性)を検討し、優先順位を検討されることが、CSR活動をより効果的に実施する鍵になると思います。

第三者意見を受けて

この度も貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。
今回の報告書のうち、常に社会から注目される経営者のお一人カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社増田社長をお迎えしてのトップ対談では、具体的なエピソードに裏打ちされた経営者としての視点に加え、弊社の歩みを知る沿線ご出身のお一人としての温かい視点から、弊社の社会的役割に示唆されるなど、巻頭を飾るに相応しい内容になったと喜んでおります。
京阪グループは、地域社会、お客さま、株主、従業員など、永年にわたり多くのステークホルダーの皆さまとの良好な関係を発展させていくことを第一に、事業展開を進めてまいりました。事業を取り巻く環境が著しく変化する中、多様化するそれぞれの事業活動において、創立委員長・渋沢栄一翁の教えにも繋

がる「経営理念」に基づき、「京阪らしさ」をいかに実践し社会の発展に貢献し続けるか、ますますその真価を問われる時代を迎えていると実感しております。

今後とも、頂戴したご意見を基に、CSR活動の充実はもとより、初の試みとして行った鉄道事業での「CSアンケート」などステークホルダーとの積極的なコミュニケーションを推進すると共に、鉄道事業以外での情報発信についても工夫し、ステークホルダーの皆さまからご評価頂き、京阪ブランドの向上と「選ばれる京阪」への挑戦に向け、引き続き努力してまいります。

平成26(2014)年8月

京阪電気鉄道株式会社
経営統括室 経営戦略担当 部長 塩山 等